

的ステイタスとなるその「象徴機能」。語学教育の体制化は揺るぎない。

しかし、最近この教育者と学習者の相方の制度への過度の固執が生み出した語学教育の閉塞状態が、この制度に周期的に入れかわる若くナイーブな学習者側からすこしずつ開かれ始めた。専修学校への同時修学や、海外留学を可能にするまでに社会が豊かになり、いわゆる国際化が個人生活へも影響を及ぼし始めた。激しい生存競争にさ

らされた私立大学などでは姉妹校や海外校などでのアブロード・カリキュラムが新たに「制度」化され始めた。個々の学習者の能力の開発と養成をいかに効果的にするかシステムの原初の理念を求めて、語学教育の在りうべき姿の模索がはかられはじめたのである。もはや色褪せ始めたかに見える時代のキー・ワード「ベレストロイカ」が今度は我々の内なる壁を打ち破るのだろうか。
(1990. 3. 28)

「美」との出会い

中川益夫

本学の一般教育科目の中で、通常科目・総合科目、更には高学年一般科目を見渡しても、「美学」に相当する授業が開講されていないことに最近気付いた。筆者が三十年以上前に受けたのと同様の講義題目は、人文・社会・自然科学系列の中で、大抵見当たるのだが、美に関する講義が「芸術学」の中に含まれているにせよ、(未定)などの部分もあって、何か物足りない気がするのである。

筆者は、広義の「美学」は、以下に概述するように、自然・社会・人文にまたがる総合科目として、大変魅力に富んだ、しかも総合性のある学問領域だと考えている。そこで、ここに美の総合的探究の必要性についての私の小論を提示し、筆者の大学教養時代から今日に至るまでの「美」との出会いを振り返って、拙論の裏付けとすると同時に、本学における新しい総合科目「美」の探究一開設への打診とさせていた

だきたいと思うのである。

さて、「美」に関する理論を「美術」「芸術」に限定しないという前提のもとに論を進めたい。

まず思いつくのは、数学における美である。小学校で習う四則演算。いやそれ以前に、整数であれ有理数・無理数であれ、実数・虚数いずれであれ、数そのものが持つ魅力や美しさというものに、折にふれ感嘆してきた。また、幾何学では、初歩的なことしか知らないが、図形のもつ不思議さ、内に秘めている内的関連、場合によっては調和といったものを学び知った。ピタゴラスの定理などは二百通り以上の解法があるとい一般教育で教えてもらったが、その定理にも、その解法にも、美しさというものが附随しているように思う。今はやりのフラクタルにも、美がある。従って、数学でいう「美」の概念は、絵画・音楽・彫刻でいう美とは、またちがった内容・定義で説明

されなければならないものを含んでいるのではないか。それは形式の美であり、論理の美であると言えるであろうか。

同じ自然科学でも、物理・化学・地学における美は、またちがう。それは、数学の論理とは似ていても実はちがう、具体的な物質そのものが持っている道理、換言すれば物そのものが持っている法則の美しさといったものではないかと思われる。こちら側から見れば、先程の数学の論理は、抽象的な点・線・数（更には時間・空間）が持っている美であると表現することが出来るかも知れない。

二十世紀の天才物理学者アインシュタインは、「自然の（物理的）法則は、単純なものでなければならない」という命題を指導原理にしていたと言われている。すなわち、一見複雑怪奇な森羅万象の背後にある、単純でしかも美しい法則を見出していくことが、物理的自然科学のめざす目的ということのようである。現に、彼の提唱した、特殊・一般相対性理論は、極めて単純明快な二、三の原理から出発している。歴史をさかのぼれば、マクスウェルの電磁理論でも、ニュートンの古典力学の体系も、単純な定義と基本的法則から組立てられてきたと言えそうだが、（物理的）学問体系全体が単純だとか簡単だとかいうことにはならないが、浜辺で何かしら「美しい貝殻」を拾っていると表現したニュートンの言葉が意味深く思い浮かぶ。

ところで、生物学を一応抜いたのは、生命体の内に秘められている特有の美があるからだ。合目的性だけでは説明できない、生きるための適応と闘争の美といったものが、介在しているのかも知れない。但し、これは軽率に言うことの出来ない問題で

あって、学問が未発達のために神秘的であるのをひとまず美と表現しているにすぎないのかも知れないし、或いは、物理・化学・地学などは別にあるような美など、もともとないのかも知れないが、永遠に解明しつくせない生命の神秘さがとりもなおさず美であり続けるということかも知れない。このあたりは、自然科学と社会・人文科学との接触面ともなってくるはずであろう。

自然科学と人文・社会科学の別の接触面に工学がある。工学における美の追求には、（他分野の場合もそうだが）歴史的変遷があった。人間への自然科学の応用をめざすことには変わりはないけれども、或る時には形式美（ないしは構造美）に重点が置かれ、或る時には機能美（ないしは効能美）に重点が置かれたりしてきたのではないか。最近では形式美と機能美プラス人間にとっての快適性、それも一時的なものではない、長い目でみた、いわゆる人間工学的 ergonomics（省資源、環境との調和、人間の感性への配慮を含む）であることが要求されるようになっていく。便利性、早い、安いなどが追及テーマではなくなったということであろう。

これまで、主として自然科学サイドの分野におけるさまざまな「美」を調べてきたが、これら全体をひっくるめての美に共通性があるだろうか。筆者はさし当たりそれを関係・相互作用の美と捉えているが、立ち入った論議が必要なこと言うまでもない。

一方、法学・政治学・経済学・行動科学・心理学等社会科学における美とは何であろうか。一例として、日本国憲法の前文は「美しい」と言われる。それは何故か。どこが、どういうふう美しいのか。筆者はこれ以

上深入りすることは避けるが、独自の「美」のとらえ方が根底にある筈であろう。

他方、哲学・倫理学・文学・芸術学などと言われる「美」には、それぞれ独得のものがあることは確かだ。「美」は哲学の主要テーマの一つであったし、文学とは、言語表現における美を追求するものと一口には言えないこともない。「源氏物語」は美しいし、ゲーテ「ファウスト」は、これまた美しい。共通点はあるにちがいないが、今の筆者には、それぞれに美しいというよりほかない。しかも、これまでに最もすごいと思った小説は何かと聞かれたら、ドストエフスキーの一作を挙げるが、それは美しいかと聞き直されれば躊躇する。

これと似た事情は芸術にもある。例えば、ゴッホの絵は強い感動を与えるが、美しさの点では、例えばセザンヌの方を選ぶ人もあるだろう。印象派の人々の作品こそ美の極致だと思う人々もあれば、カンジンスキーらのアブストラクトに与する人々もあるはずだ。ミロのヴィーナスはもちろん美しいが、サモトラケのニケの方が芸術性が高いとする人もあろう。音楽にしても同様で、ベートーヴェンを優位に置く人もあれば、モーツァルトに、シューベルトに、バッハに熱をあげる人もある。いずれも美しい。だが、どう共通していて、どこがちがうのか。

筆者が大学一般教育で学んだのは「美学史」の解説が中心であった。中味は殆ど忘れたが、井島 勉著「芸術とは何か」(アテネ文庫)からの引用でのしめくりに、「表象性と人間性と世界観。芸術観はこのような系列を貫いて芸術を作り出すのである」とあった。形式美だとか秩序、あるいは単純性などといったシンプルな表現では言い

つくせない複雑な構造をもっていることを思い知らされたが、それだけに「総合性」の試金石になるのではないかと思いついた。

宇宙ロケットから見たガガーリンが「地球は青かった」と言ったときの地球の美しさ(間接体験)、久し振りに見る夕焼けの壮麗なまでの美しさ(直接体験)などは、いずれも万人に共通になりうるものである。筆者個人の体験としては飛行機内から見た、青空の下に広がる白一色の三月のアジア大陸、太平洋上の地球の夕暮れ、ミシガン湖を背景とした朝霞あさかの中のシカゴのビル群、それに北氷洋上での太陽光の反射などは、自然美であり人工美であり、科学技術のもたらした美であった。ツェルマツトから望むマッターホルンのときすまされた姿、アルプスの麓ふもとリンダーホーフでの空気の輝き(空気の分子が光っているように見える!)などの美は、誰にでも現地に行けばわかるであろう。しかし、一九八六年三月、苦心の末、ハレー彗星の姿をようやくとらえたときの感動は、皆に理解してもらうのは容易でないと思う。なぜだろう。大学生の頃、京都市バスで乗り合わせたバスガイド嬢の説明が美しいと心から思ったのは、たとえ同じ経験をした人でなくても解ってもらえそうであるのに。

一般教育総合科目でも、高学年一般教育科目(筆者のいう後段一般教育、review)でも良い。何を一番「美しい」と思ったかという体験を持ち寄ることから授業に入っていくのもよいし、各学問分野における「美の定義」を担当教師間で連絡をとりながら、学生と共に追究していくのも面白いのではないか。

今のところ、これに関する既製の「教科

書」はない。明快な結論としてまとまらなくとも良い。教師と学生がめいめい持ち寄り、統合し、分析し、総合することによってのみ、美のさまざまな姿が広まり深まり、高まり明らかになっていくであろう。

他大学で同趣旨の試みの例があるかどうか調べて教えて下さる方があれば歓迎であ

る。不十分な本小論を修正補充していただけるのも、なお有難いと思う。しかも、何とんでも「美」に関する一般教育授業開講へ向けて叱咤激励ないし協力を申し出ていただけるならば、筆者にとり、また新たな「美」との出会いとなることは間違いない。
(1990年6月30日)

所感三題

村瀬裕也

1 少女よ 君の命のために遁走せよ

今年の3月、京都国立近代美術館で開催されていた国吉康雄の生誕100年記念展を観た。とはいっても、他の所用のついでに立ち寄ったまでであって、この展覧会のためにわざわざ京都まで出向いたわけではなかった。つまり国吉康雄はそれまでの私にとってそれほど馴染み深い画家ではなかったのである。

勿論この画家が、日本美術史というよりもむしろアメリカ美術史のなかに確固たる位置を占める声価の高い画家であること、1930年代以降、政治的意識を高め、反戦・反ファシズムの活動に献身した進歩的美術家であることくらいは知識はもっていた。しかしそのような生涯に対する尊敬と、その作品に対する印象とは私の内部でしっかりと結びついてはいなかった。もっとも「その作品に対する印象」などと偉そうなことをいっても、それまで私が実物を観た彼の作品といえ、あの有名な横臥した女性像くらいで、パスキンやキスリングと類縁の、しかしエコール・ド・パリ風の優雅さを欠

いた、妙に生々しい頹廢のリアリティをもつその女性像は、いささかアクの強い背景の色調と相俟って、私の繊弱な感性には快い感応を呼び起こさなかったのである。

だがそのような食わず嫌いの偏見は、この展覧会を観るに及んでひとたまりもなく瓦解した。その生涯を通じてこれほど多彩な作風を試み、しかもその変遷を通じてこれほど思索的な探究の姿勢を一貫させ得た画家はそう多くはないであろう。初期のやや甘味なメルヘン調の幻想、デフォルメされた牛のおおらかでユーモラスなイメージ、アンリ・ルソオ風に稚拙化した屈託のない人物、大恐慌期の民衆の苦悩を体現した女性達、ベン・シャーン風の寂寥感の漂う風景と人物、そして晩年を飾る一種狂気じみた原色と奇怪なイメージの乱舞、——そうした様々の主題が、意識的・方法的な探究に貫かれて、段階ごとにそれぞれ充実した内容を形成しているのだ。私がかつては余り好きではなかった女性像も、こうした流れに位置づけて観ると、単なる頹廢への耽溺ではなく、ぎりぎりの状況にお